

## 開拓の群像(九)

### 佐藤 倉吉

サロマ湖に汽船を入れて  
木材を清国へ売りに行った男



佐藤 倉吉

開拓当初は先ず、千古の原始林の巨木の伐採から始まるが、交通不便のため素晴らしい銘木もみな焼却して開墾しなければならなかった。

而し、次第に北海道木材の真価が認められるようになる、大手業者が入込み、本州方面や当時の清国などへ輸出が行なわれるようになった。

明治から大正、昭和初期までこの地方でもサロマ別川を流送して、川口付近で筏に組み鑄沸まで船曳きして、積取船(汽船)の来航

を待つて外海で船積みして、遠く阪神方面や外国までも売られておりました。

◎明治三十八年幌岩西に、一二五町歩を払下げて入地した佐藤倉吉は、阿部吉治(小作人)と開拓に励んだが、余りにも素晴らしい大木の樹立に、木材業を思い立ち、銘木をサロマ湖へ切り出し、勿論 水深を測定したのである、大きな汽船を湖内まで入れて積み込んで、自から清国へ向かい上海の市場で売り捌いたとのことです。(津田類一郎(当時船積み作業に雇われた、昭和三〇年没)の談)

サロマ湖は、その頃鑄沸(現栄浦)に湖口があり、秋から冬にかけて、オホーツク海の時代化で湖口が塞がり、先住民の時代から「湖切り」と言って、人工で砂を掘って湖水と外海との落差を利用して、湖口を開けていたので、狭くて深いものであったと思われます。

佐藤倉吉は、各地から木材を買い集め、さては樺太、朝鮮まで回航して取引をしたと言う。

(佐藤倉吉氏孫「佐藤章氏」札幌在住談)

◎佐藤倉吉は、嘉永三年(一八五〇)一二月に越後の国上岩井村に生れ、明治三年二〇歳で渡道、札幌で土建業を営み、明治二三年には、道庁の指名土建業者六名の中に、名を列ねるまでになった人物で、明治一九年、札幌から着工された中央道路の、旭川―網走間(北見道路)は囚人道路とも言われ、明治二四年

網走監獄の囚人千人を強制稼働し、言語に絶する苛酷な重労働で、二三〇人もの死者を出し、凄惨たる犠牲によって開設された道路として、忘れてはならないが、明治政府は、道路開通を急ぐ余り、忠別太から中越までの内、伊香牛から中越(網走―中越間は網走監獄の囚人)までの一〇里を、民間業者に請負わせることとしたのです。

道庁は、数人の請負業者を呼んで(倉吉は用事で欠席)工事設備をした結果、皆怖れをなして辞退してしまい、後日倉吉が呼び出されて請負うことに決まったのです。

原始林の中の難工事であり。而も一〇里の区間を五月から十一月までの六ヶ月間で成し遂げたのでした。

又、佐藤倉吉は一方で、木材業も営み、後に鉄道枕木専門となり、道内の枕木ならば、一手に引き受け納入すると言う、勢いであつたと言う。

(この話も(佐藤章)札幌在住談)

佐藤倉吉は、明治三八年、五五歳のとき、幌岩西一線―二線に一二五町歩の払下げを受けて来住、農牧場を営みながら、自からは専ら木材業を手広く営んでいたが、次第に開拓地の木材資源も枯湯止むなく廃業し、大正一年、七三歳でこの世を去った。

(室井 四郎)